69

清以前本草図の作風と学術価値

鄭　金生

現存する中国清以前の本草書三三種に薬図があり、作風は各々異なる。本草図の学術価値は実物の写生か単なる創作かに左右され、この点から清以前の本草図を検討した。

唐代：中国主流本草で正式な絵図を最初に載せたのは『新修本草』だが、その彩色図二五巻は早くに散佚した。ただし現存の『天宝単方薬図』三幅より唐代官修本草図の作風がわずかに窺える。特徴として植物の主茎を図の中線に置き、基本的に左右対象の構図で描くため、各部の比率は正しくない。この作風は宋の『本草図経』に影響した。

宋代：完全に現存する最も早い本草図は『本草図経』の九三三幅で、大多数は政府が各地に描かせた写実図によるが、一部は内府所蔵図から転写された。このため作風は必ずしも一致していない。基原物の原貌を可能な限り表現することが前提だが、薬用部位の強調で各部の比率が失なわれ、少数の外来薬と鉱物薬は想象か示意図である。本書の最大特長は大多数が実地に写生されたことで、基原の考証に価値が高い。宋以後の本草書は多くが図のすべて、あるいは一部を本書に取材した。南宋の『履讒岩本草』は画家の王介が居住地周囲の草薬を写生したもので、二〇二幅が現存する。王介は馬遠・夏圭の山水画法を本書に応用し、局部を用いて全体を表現する。各部の比率は適切で、構図にも躍動感があり、美学的にも科学的にも価値が高い。

元代：『飲膳正要』の付図一六八幅は、一部を『本草図経』から引き写すが、イチョウ・ニンジンなど新たに加えた写生図もあり、図はかなり細緻で形態も単調ではない。しかし、いずれも日常飲食物のため、薬物考証への利用価値には限界がある。

明代：『救荒本草』の図は四一四幅で、うち二七六幅は画工の写生による。図は精細・端正で、一人の手で作

風が統一され写実性も強いため、科学性に優れる。『本草品彙精要』の彩色図一三五八幅の七〇％は、『本草図経』と『飲膳正要』の図を彩色に描き直している。ただし少数の薬図や新大陸から当時伝来したばかりのトウモロコシなど、宮廷絵師が新たに描いた図の多くは写生で、とりわけ魚類・貝類の図は美しい。のち『金石昆虫草木状』『本書図譜』等はみな当書の図を転写した。当書の図と作風が同一らしいのは『食物本草』（四六七幅）で、宮廷絵師の作だろう。絵師が熟知する栽培植物や酒造法を精細に描く一方、イチョウやラッカセイなど未見の物は想像図となっている。『本草綱目』の初版には一一〇九幅の図があり、李建元と李建木の作。うち九四種を『本草図経』から転写した以外はみな新作だが、粗雑なため李時珍の学術を反映できていない。のち当書の図は明・陸吉と清・許功甫の二度にわたり描き改められ、それらに初版の原貌はない。

医薬業が発展すると生薬鑑別の必要性が本草学に生じ、早くは『本草蒙筌』等から少数の生薬図がある。『本草原始』はすべて作者みずから写生した生薬図三七九幅を載せ、各特徴を薬図上に初めて標注したことで生薬鑑別に役立つが、翻刻本では薬図が不正確になり価値が失せた。のち明の『本草彙言』や清の『本草匯』の薬図も多くは生薬図だが、大部分は前人の書より取材している。

清代：『植物名実図考』の一八〇五幅のうち、一五〇〇幅は作者が写生した植物図である。各部の比率を正確に描くため植物鑑別が可能で、科学的価値が頗る高い。ほかには民間草薬を反映した『草薬図経』『草木便方』があり、それら薬図の写実性も高い。明清間の通俗的本草書と類書にも薬図が載るが、多くは坊間の書商が読者うけのため前人の薬図を転写しただけで、科学的価値は小さい。

上述のごとく本草図の作風は各時代の医学レベルに影響され、科学的価値は描いた人物の知識に左右されていた。薬物に通じ、絵画に熟達した者の描いた薬図こそ、歴史的に最も高く評価されるのである。

（中国中医研究院中国医史文献研究所）